

沖

11
2018

俳句雑誌【おき】



這ひ松

能村 研三

美緒の結婚

呼ばれたる夜食の後の長居かな

駿府城跡二句

石垣 印 畏みて 入る 蛇 穴 に

弥次喜多の真中に座り小鳥来る

千葉市動物園

秋寂ぶや 倦^{あぐ}み 払ひの 豚の 耳

十月十四日に長女美緒が明治神宮の神殿で結婚式を挙げた。披露宴は四十一年前に私たち夫婦が挙式をあげた明治記念館で、ここを会場に選んだのも私たちに倣う気持があつたからのようであつた。を覚えた。

挙式は境内を列をなして歩く三進の儀があり、明治神宮を訪れた参詣客や外国人観光客がカメラのシャッターを切つてくれた。

私の三人の娘、長女美緒、次女麻衣、三女紗恵は二つずつ年齢が離れて生まれた娘で、いつのまにか女系家族の中の暮らしが身についた。子どもたちが大きくなるまで父と一緒に一つ家で暮らしたので、父登四郎もことあるごとに子どもたちのことを詠んでくれた。

美緒が生まれた時は

美しき緒に鈴つけむ小春風

という句で誕生を祝つてくれた。

その後

罐月の芋ころげして三童女

紐すこし貫ひに来たり雛納め

うち孫に外孫花のもすもすも

などの句を詠んでくれた。私も美緒の成人式にこう詠んだ。

桜いろして成人の日の吾子ならむ

秋惜しむ帝釈さまの木彫師と

這ひ松の五体投地の手入れかな

山門に智衆蛾次郎露けしや

大仰な帽子の箱や秋行けり

冬隣斑目しるき朴の幹

平明な言葉は勁し桐一葉

美緒は長女で二人の妹の面倒を見る優しい子で、三姉妹は小中高と同じ学校に通った。

今回のご縁は大学時代の同級生でともに歴史学科で学んだ間柄だが、美緒は結婚後も仕事を続けるつもりで、私の家の近くに住むので急に寂しくなることはなさそう。

娘婿の英俊さんは神奈川の茅ヶ崎が職場で市川から毎日東京を越えて通勤するそう、その苦勞にも頭が下がる。また能村の姓を名乗ってもらうこととなり、娘ばかりで家の継承については諦めていたので大変嬉しいことである。四月に結婚した次女麻衣の娘婿の英紀さんは先日の千葉例会の千葉市動物園の吟行に参加し、俳句を投句してくれたことも嬉しいことで、いずれ英俊さんにも俳句を作ることを勧めてみたい。

これまで女系家族だった能村家も一気に男系家族に様変わりしそう。

鯊日和 森岡 正作

瀧人の

峡に入る旅の始めの威銃
水澄めり家郷の廃れゆくままに
鯊日和兄弟げんかさせておく
紛れたき一片のあり 鱚雲
家中を栗の匂ひに炊き上がる
朽ち舟の櫂そのままに雁渡し
手斧削りは武士の荒振り雁渡し

私の母の実家は秋田県の八郎潟のすぐ近くにあった。まだ干拓前で、遊びに行っては従兄弟らと泳いだり、小魚を追ったりした。海水と淡水が混じる遠浅の湖で、底の砂地の感触が歩いても気持ちよかった。御馳走は蜆や鮎、地元で「ちか」と言っていた、ワカサギのようなものであった。

登四郎先生の八郎潟連作の句に、
〈瀧人の大長靴が枯るる戸に〉という
作がある。昭和三十年の句なので、まさに私が小学生で潟へ遊びに行っていた頃で、干拓反対のピラが家々に貼られていた。遠浅ゆえに大長靴で漁をしていたのであろうが、「枯るる戸」に、貧しい生活の様子が感じられる。皆が必死で生きていた時代が、懐かしく思われる句である。

能村登四郎の軌跡〔3〕

能村 研三

白地着て血のみを潔く子に遺す

『定本咀嚼音』昭27

夏の夕べの入浴後に、糊の効いた白緋や白地の浴衣などを身につけると、さわやかさが心の中まで沁みとおる思いがする。登四郎には「白」を詠んだ句が多くあるが、この句の「白地着て」という上五の措辞は登四郎の清潔な生き方を象徴している。私たちに清らかな血の他にも多くのものを遺してくれた父であったが、一教師の耐乏生活時代に、こんなに真直ぐな気持の父のもので育つたことの幸せをつくづく感じる。白地の清潔感の中に、真つ新な血と命をくれた父に感謝している。

沈ひ上げ白菜も妻もかがやけり

『定本咀嚼音』昭27

句集『咀嚼音』には、妻を詠んだ句がたくさんある。この頃の我が家は八幡の京成電車沿いの一軒家の借家暮らしであった。庭に釣瓶井戸があつて、その水を汲んで生活を営んだ。庭の洗い場でせつせと白菜を洗う働きものの母の姿が蘇ってきた。登四郎は「漬物を漬けることの好きな妻は白菜を山のように買い込んで漬けている。洗い上げられた白菜も美しいが、そうした健康な妻も又美しい。」と自解している。この頃の母を詠んだ句に〈足袋あかき妻が追ひゆく厨芥車〉〈梅漬けてあかき妻の手夜は愛す〉などがある。



汗ばみて加賀強情の血ありけり

『定本咀嚙音』昭29

『定本合掌部落』の巻頭を飾る句であるが、昭和三十二年の初版の『咀嚙音』にはこの句は収載されていない。初版では「北陸紀行」の作品を置き、冒頭に「内灘」の十七句を据えたことから、この頃登四郎が社会性俳句に対してやや否定的であったにしろ、かなり意識していたことが窺える。北陸の旅について登四郎は「句風の脱化をはかるため、ひとり金沢・能登に旅した。金沢・能登を選んだのは、父祖の地である自分のルーツを探るためだった。」と述べている。加賀強情は登四郎の父のことで一度言い出したら後へ引かなかったという。

霧をゆき父子同紺の登山帽

『定本咀嚙音』昭30

前年の北陸の旅に続き、北陸の魅力にひかれて今度は娘の萌子を連れて立山登山を試みた。萌子はこの時中学一年で、未だバスが美女平まで行かなかった頃だった。一連の作品六十七句はこの年の「馬酔木」十一月号に「父子登攀―長女萌子を伴ひて立山に登る―」に発表された。娘を連れての初めての旅で登四郎は嬉々として明るく健康観に満ち溢れていた。やや社会性に傾きかけた登四郎を思い止まらせた作品群であったのかも知れない。この後、萌子は富山から一人で帰り、登四郎は一人で飛騨の合掌部落の取材に出かける。

蒼茫集



流 星 辻美奈子

踊り場 千田百里

*フアクシミリは昭和の速さ秋うらら母われにだけ流星のまだ見えぬ残る海猫なり赤き声してあたり厄日くる猫にとぐるのやうなもの重陽の雨のあかるきまま不意に唐辛子干すや日差にすこし噎せ

装身具外す秋思の指をもて聴いてみたきはおかめ蟋蟀のこ糸秋日傘連ねて母の遠忌かな小さき秋探しに日田の下駄履いて*月光が踊り場に待つ奈良ホテル梨を剥く音のみが音夜の家

九 月 大畑善昭

背が伸びて 栗原公子

*昼寝とは地球に浮寝するごとしたまの雷なら激しさを善しとせり谷水のぎゆうぎゆうと行く九月かな稲妻やこの頃天変地異しきり地球安らか蟋蟀がゐるかぎり蜻蛉に目鼻風化の地蔵尊

ままごとのやうに飾りて魂迎黙禱に体の傾ぐ残暑かな二百十日一膳の飯解凍し何の黙示か空一面の稲光*夏終はる黙読できて背が伸びて夕かなかな日差しの中をよぎる雨

歩休め

成宮紀代子

きんきんにトマトの冷えて皿緊まる
*スマホ繰るあまたの孤独雁渡し
爪立てて解くこま結び鴟高音
歩休めの夫に気付けり帰り花
局止めの荷紐幾重に秋の雷
夫の言ふことに一理や夜半の秋

黙読

能美昌二郎

姿なき空に向かひて威銃
*逝く夏や海をはなるる空の色
殿の山車に付き来る秋の風
抜き襟のうなじ白々盆踊
線香花火星になれずに落ちにけり
黙読のくちびる動く今朝の秋

一輪の

大川ゆかり

夜は灯を湛へホテルのプールかな
星涼し白蝶貝のイヤリング
*一輪の浮遊からすうりの花
くちなはの過ぎし跡まで嫌はるる
海映ゆるやうに活けられ黄のダリア
雨に雨重なる窓や夜の秋

*



潮鳴集



ボヘミアン

町山公孝

語尾太く長し秩父のつくつくし
鯨舟の川上を向く日向かな
父が釣るそばで子が釣る鯨日和
干からびてからが生きがひ唐辛子
中天の月と乾杯ボヘミアン

秋 扇

大沢美智子

はたと止む翔先生の秋扇
朝顔や実(げ)に奥能登の海の色
落蝉をそつと乗せたる三輪車
曼珠沙華川面かげれば騎りけり
峡の田の風に段差や赤とんぼ

かの日の風

須賀ゆかり

光陰の傷持つ大樹蝉時雨
乾きぬる草のうねりや終戦日
押し花にかの日の風や秋に入る
つま先に触るる秋草リフト行く
少年のこころに歩く花野かな

銀 漢

大矢恒彦

灯を消して闇とつながる虫時雨
稲妻の瞬時に山河裏返す
銀漢やピアノの蓋の開けてある
稲の香の風の抜けくる長屋門
列島にひしめく断層大根蒔く

沖作品



能村研三選

水玉の杖溪谷の青もみぢ

福岡

吉武 美子

* 曼珠沙華万の手仰ぐ地獄絵図

欄干の気長な釣や案山子どち

秋暑しマリオネットの糸数多

対称に畳むリハビリ秋夜長

七彩を一筆に引き虹立てり

自転車の住職過ぎぬ白木槿

千葉

稗田 寿明

* しづかなる正午日本の敗戦日

鉄棒にぶら下がる吾子休暇果つ

鹿ヶ谷南瓜座禪をしてゐたる

帆の形の家持の歌碑虹立ちぬ

市川

栗坪 和子

魚築番は白きチョークで書かれあり

* 鯖鮎やどつと夕暮せまりたる

競りあとに秋鮫の子の残されぬ

善昭師の黒きベレーや雁渡し

初秋の島の静寂にフェリー着く

福岡

永尾 春己

新涼や船べりを打つ波の音

リヤカー引く母の麦わら帽子かな

* 山頂は星の海原虫すだく

次々と飲茶の籠や秋の宵

サーファーの張り付きのぼる波頭

千葉

岡本 秀子

窓開けて窓の幅なる風は秋

対局の一手の詰めや夜の秋

* 噴水の頂点と言ふもろきもの

木洩れ日の差して留守なり女郎蜘蛛

過去よりも未来明るく浮いて来い

* ケルン積む峰をこれより山頂へ

去りがたき街の一つや長崎忌

ひとしきり蔵町めぐる帰燕かな
衣被さらりと話題変へにけり

西村 潭